

日本宗教学会 第 80 回学術大会

パネル発表要旨集

学術大会 会期：2021 年 9 月 6 日(月)～8 日(水) オンライン開催

主催：日本宗教学会第 80 回学術大会実行委員会（関西大学）

開催パネル一覧

9月7日(火)		パネル題目	代表者
15:00-17:00	meeting room 1	エラノスという交差点ー「宗教学」の形成史的再検討ー	奥山 史亮
15:00-17:00	meeting room 2	宗教哲学研究から見た宗教概念批判の意義	下田 和宣
15:00-17:00	meeting room 3	暦の思想史	林 淳
15:00-17:00	meeting room 4	グリーンフと「あいだ」の時空	安藤 泰至
15:00-16:40	meeting room 5	実態調査から窺う真宗寺院における新型コロナの影響と課題	葛野 洋明
15:00-17:00	meeting room 6	JARS-KARS Joint Forum: Toward Post-COVID-19 Networking	FUJIWARA Satoko
9月8日(水)		パネル題目	代表者
15:00-16:40	meeting room 1	井筒俊彦の「東洋哲学」前夜	澤井 真
15:00-17:00	meeting room 2	性愛と暴力の神話学	木村 武史
15:00-16:40	meeting room 3	アメリカで仏教を語るー世紀転換期の日本人仏教者を手がかりにー	守屋 友江
15:00-17:00	meeting room 4	科学技術に浸透する／される宗教	師 茂樹
15:00-17:00	meeting room 5	コロナ禍の「人生会議」ー「生と死」にどう向き合うかー	沖永 隆子

パネル趣旨本文は、提出された原稿をそのまま掲載するのを原則としています。

エラノスという交差点－「宗教学」の形成史的再検討－

オットー・グロースと心理学	代表者：奥山 史亮
近代日本の民間精神療法における瞑想・ヨーガの流通	藁科 智恵 (日大)
エラノスにおけるヨーガ研究と宗教刷新運動	栗田 英彦 (佛教大)
鈴木大拙の禅思想史研究における公案論と「超智」・再考	奥山 史亮 (北海道科学大)
	飯島 孝良 (花園大)
	コメンテータ：深澤 英隆 (一橋大)
	司会：奥山 史亮 (北海道科学大)

カール・グスタフ・ユングとオルガ＝フレーベ・カプタインが中心となり 1933 年に創設したエラノス会議は、諸学問の研究者が集って宗教の根源的一体性、すなわち「聖なるもの」を「治療」の領域において復興しようとした学際的会議として知られている。宗教学、神話学、人類学、宗教研究等からも当時を代表する論者が多数参加し、その形成展開において大きな役割を果たしてきた。しかし従来は、ユング心理学の理論形成の場としてエラノス会議を捉える傾向が一般的であり、宗教学の理論展開の場として捉えて、その歴史的コンテクストを宗教学的見地より分析することは殆ど為されてこなかった。宗教学という学問自体の形成史が問われている現在、エラノス会議とは宗教学にとってどのような場であったのだろうか。精神や文化の問題を病理と捉えて、その治療として聖の復興を目指したエラノス会議には如何なる学的潮流が流れ込み、宗教学はそれら諸学問と何を共有し、如何に差異化してきたのだろうか。エラノス創設前史から戦後に至る、当時の民族主義宗教運動、生活改革運動、宗教刷新運動、精神療法運動などとの交差を見据えながら、エラノス会議において宗教学が形成されていったコンテクストに迫りたい。

まず藁科が、オットー・グロースと心理学の関係を検討する。脳精神医、生活改革運動家、アナキスト等の多様な側面を持つグロースは、エラノス会議が開催される場、アスコーナの文化を体現する者として位置付けられるだろう。ユングは彼の中に自らの「双子の兄弟」を見出し、その精神分析への理解の深さを高く評価していた。彼が晩年に展開する社会体制批判における無意識の心理学の位置付けを分析することにより、エラノス会議の持ちえた精神史的意味を照射する。

続いて栗田が、近代におけるヨーガ・瞑想のトランスナショナルな展開を踏まえつつ、20 世紀初頭の日本の民間精神療法におけるヨーガ・瞑想の流通を分析する。これを通じて、エラノス会議が「図」として浮かび上がる「地」に光を当て、鈴木大拙のようなエラノス参加者との同時代的連続性を考察する。

次に奥山が、エラノス会議のヨーガ研究と宗教刷新運動の関連を分析する。ユングはナチズムを支持することになるヤーコブ・ヴィルヘルム・ハウアーと共同して、「インド・アリア」の原宗教に接近する手段としてヨーガを研究し、エラノス創設に至った。エリアーデはユリウス・エヴォラらの影響のもと、正教会とヨーガの本源を神秘主義として捉え、民族的宗教の刷新に繋げようとした。一方エラノスにはブーバーやショーレム等のシオニストも参加し、前者との間に緊張関係が生じていた。上記の交差点として、エラノス会議を捉える。

最後に飯島は、鈴木大拙の禅思想史研究に焦点を当てる。その研究の根底には、「霊性」や「即非」といった問題など、井筒俊彦に影響した部分がみられる。これに関連して、大拙は体験としての公案や念仏が、如何に根本的な自己（意識と無意識）への認識をもたらすかを問っている（『禅と真宗の心理学的基礎』1937）。この問いは E・フロムらとの共著『禅と精神分析』（1960）にも引き継がれており、1950 年代にエラノス会議に出席した頃の大拙の関心にも関わると考え、分析を試みる。

コメンテータはエラノスへの参加経験があり、研究分野も関連がある深澤に依頼した。各発表の後、深澤のコメントを受けてからフロアを交えた質疑応答に移行する。

宗教哲学研究から見た宗教概念批判の意義

宗教の概念と生活の形式—宗教概念論の理論的背景—	代表者：下田 和宣
綱島梁川の宗教体験言説と伝道—言語ゲーム論による分析—	下田 和宣 (成城大)
ポストモダンの神義論	古荘 匡義 (龍大)
問いとしての宗教—ハイデガーの場合—	根無 一行 (大谷大)
	樽田 勇樹 (京大)
	コメンテータ：山根 秀介 (舞鶴高専)
	司会：下田 和宣 (成城大)

本パネルは、これまで展開されてきた「宗教」(religion)概念についての概念史的批判に対して、宗教哲学研究の側から積極的な応答を試みる討議の場として企画される。キャントウェル・スミスやタル・アサド以降、religionの概念およびその訳語としての「宗教」が持つ歴史的コンテキストの限定性を考慮することが、宗教研究には一般的に要求されることとなった。その要求の背後には、宗教に関する従来の学問的言説が含み込む文化帝国主義的支配形態へのポスト・コロニアリズム的反省がある。このような議論が広く共有されるなかで、宗教哲学研究の側からのレスポンスも、多くはないがこれまですでに見受けられるものである。しかしそれでも反応は多種多様に分化しており、論者間で何らかのコンセンサスが形成されているとは言えないのが現状である。

この問題状況を受け、本パネルでは宗教概念批判が宗教哲学研究に対して持ちうる意義を共同で討議する。究極的に概念化されない生の領域を問題とするにしても、宗教哲学的思索もまた「宗教」という概念の使用を避けることはできず、そのかぎり制約を持つはずである。本討議は、そのような反省を宗教哲学に対する攻撃と見なし対応を考慮する場ではない。むしろまずは、その反省が持つ射程をできるかぎり正確に見定めながら、その宗教哲学的意義を多角的に吟味することがなされなければならないのである。そこから、宗教哲学批判を積極的に受けとめつつ遂行される宗教哲学研究を新たに構想することも期待できるに違いない。

このような観点から、このパネルでは以下の4人の提題者が、宗教概念批判の成果を、それぞれの宗教哲学研究の専門領域へと関連づけ考察を行う。

下田(「宗教の概念と生活の形式—宗教概念論の理論的背景—」)はタル・アサドの宗教概念批判の諸テキストから、そこで使用される文化哲学的概念に着目することで、アサド的「哲学」の可能性をあえて提示する。彼が

依拠する概念装置そのものを吟味することは、宗教概念批判の持つ意義と射程に対する考察の新たな糸口となるはずである。

古荘(「綱島梁川の宗教体験言説と伝道—言語ゲーム論による分析—」)は綱島の宗教体験言説の分析を通して、宗教概念批判以降の言語ゲーム論の新たな活用を模索する。綱島は異なる宗教的背景をもつ道友たちと、意味内容の一致しない概念を用いつつも、ともかく互いの体験や信仰を共有する言語ゲームを成立させていた。このゲームが成立したのは、綱島が「伝道」のために宗教体験を語っていたためだと思われる。

根無(「ポストモダンの神義論」)は、「ポスト世俗」における宗教の積極的なポテンシャルを「宗教なき宗教」という仕方で引き出そうとするジョン・D. カプートの考察を扱う。信と知の峻別がもはや不可能な時代において、カプートはある種の盲目性に宗教の可能性を託すが、そこにはポストコロニアル的視点が欠如しており、再び形而上学へと回帰してしまう可能性をはらんでいる。この検討から、宗教概念批判以降なお可能な宗教のひとつの姿を探る。

樽田(「問いとしての宗教—ハイデガーの場合—」)の提題は宗教概念批判という観点からハイデガー哲学を見直すものである。ハイデガーは宗教のもとで、哲学のいとなみと伝統をラディカルに問い直す。もし、近代に取り返された哲学的原理を核にふくむ運動の行く末として世俗主義を理解するなら、ハイデガーの思考には、それをラディカルに問いつめてその臨界点へと差し戻すような契機も懐胎されていたと考えられる。

提題者の発表は多岐に渡るため、本パネルでは外部より山根秀介氏に総括となるコメンテータを依頼した。宗教概念批判を推進してきた北米宗教学と親近性の高い土壌のもとで育まれたアメリカ哲学を専門とする山根氏により、全体を見通す観点が示される。

暦の思想史

江戸時代の暦と暦注

天保期の江戸暦問屋と大小暦の統制

近代の官暦と神社の例祭日

仏暦の忌日と「日本仏教」

代表者：林 淳

林 淳 (愛知学院大)

小田島梨乃 (東大)

下村 育世 (一橋大)

岡田 正彦 (天理大)

コメンテータ：中牧 弘允 (吹田市立博物館)

司会：林 淳 (愛知学院大)

暦の人文的研究は、日本史学者の岡田芳朗が先鞭をつけ、一つの研究の分野になり、人類学者の中牧弘允が継承し、世界の暦文化を視野にいれた研究に進みつつある。岡田は時間軸をもって暦の歴史を探究したが、中牧は世界各地の暦文化の歴史と今日的状況について情報を収集し、かつ情報を提供する(『こよみの学校』、『世界の暦文化事典』)。中牧は、暦法への関心よりも暦を通して文化や情報が表現され交差するあり方を読み解くことに関心をもつ。それは、「方法としての暦」の研究と呼ぶことができる。今回のパネルは、中牧の「方法としての暦」の研究を発展、継承する目的で企画されている。発表者たちは、近世から近代への暦を素材にして、政治、宗教、出版文化、学知、国家との関連を重視して暦の内部と外部を読み解こうとする。暦を一次資料として扱い、細部にこだわるが、暦を通じて宗教と文明を見直すという意味で「暦の思想史」というタイトルをつけた。このタイトルには、暦が思想史の対象になりうるという主張がこめられている。

林淳の発表は、貞享改暦(1685年)以降の画一化された江戸時代の暦に掲載された暦注を対象にして、どのような変遷があったのかをたどる。貞享暦以降の暦は、二十四節気、日食、月食などの正確な日時が記されるようになり、農事暦の性格をもつようになった。そこには八十八夜、二百十日が記され、種まき、草刈り、麦刈りなどの暦注も含まれる。貞享改暦の以前と比較して、凶事の暦注は減って吉事の暦注が増えている。南都暦師であった吉川家文書を使って江戸時代の暦注の変遷をたどる。

小田島梨乃の発表は、江戸時代において大小暦への幕府の統制を取り上げ、幕府の暦出版統制の姿勢を問いただす。江戸幕府は貞享改暦以後、作暦を幕府主導に一本化し、地方の暦師の販路も規定することで暦流通の統制を図った。これは、観象授時の精神の如く、自らの支配体

制の象徴として暦の流通を重要視していたことの表れと考えられる。本発表では、暦出版に関する町触・江戸暦問屋の裁判記録である『暦記録』(東京国立博物館蔵)を参照しながら、江戸における唯一の取り締まり事例である天保期(1830-1844年)の大小暦の違法出版を考察する。

下村育世の発表は、従来軽視されてきた近代の暦と神社、神道との関係に焦点をあて、1873年の明治改暦の段階で既にその関係が胚胎していたことを明らかにする。明治改暦での太陽暦の採用を機に、暦面は大きく変化し、近世以来の暦注は廃される一方、国家の祝祭日、神武天皇以来の歴代天皇の忌日のみならず、全国の神社の例祭日の掲載も始まった。その数は年々増加し、当初は官幣社と別格官幣社の例祭日のみの記載であったのが、1903年の暦からは国幣社も加わり、社格制度に則り列格されるごとに追加され、終戦直前には220社超にまで膨れ上がったことを考察する。

岡田正彦の発表は、1883年から官暦の頒布が神宮司庁に一本化される状況のもとで、大日本仏暦会社刊行の『仏暦一斑』には、聖徳太子をはじめとする仏教各派の祖師の忌日や主要な寺院の年中行事が詳細に記載されたことを論じる。江戸時代の仏暦に見られる暦注は排除したうえで、官暦に記載される国家の祝祭日や歴代天皇の忌日などに対抗して記載された忌日や年中行事には、日本＝仏教国という意識と「日本仏教」の枠組みとその範疇が色濃く投影されていることを明らかにする。

コメンテータは暦・カレンダー文化研究を主導してきた中牧弘允である。江戸時代の太陰太陽暦は中国の授時暦をもとにして作成された中国文明モデルであった。明治改暦以降の官暦は西洋文明モデルではありつつ神道化を伴うものであった。宗教と文明を軸とした広い視野からのコメントを中牧に期待したい。

グリーフと「あいだ」の時空

グリーフをめぐるさまざまな「あいだ」性	代表者：安藤 泰至
逝く人と見送る人の「あいだ」で語り合う死と死後	安藤 泰至 (鳥取大)
亡き人の存在と不在の「あいだ」をめぐるグリーフ	高橋 都 (日本がんサバイバーシップネットワーク)
支援と支援のあいだー水俣病事件における持続する支援ー	大河内大博 (臨床仏教研究所)
	萩原 修子 (熊本学園大)
	コメンテータ：葛西 賢太 (上智大)
	司会：安藤 泰至 (鳥取大)

グリーフ(悲嘆)やグリーフケアをめぐる関心は宗教学・宗教研究の領域においても高まっている。東日本大震災における経験、あるいは終末期医療や介護の現場での経験に基づく宗教者の活動はこうした関心呼び起こす大きなきっかけとなったが、最近のコロナ禍において新たに生じているさまざまな問題はそうした関心をさらに広げ、そこから多くの研究が立ち上がってくることが予想される。本パネルではこうした状況をふまえて、人間のグリーフにおけるさまざまな「あいだ」的性格に注目することで、多様な問題領域におけるグリーフやグリーフケアへの関心もっている一見意外な共通性やその相互関係について光を当てることを目指して企画された。人間にとってグリーフとは、生と死、この世とあの世、存在と非存在、過去と未来、主観と客観、個人と集団(あるいは社会)、当事者と非当事者(援助者・支援者・専門家など)、ケアする者とケアされる者、人間と自然、内在と超越、といったさまざまな「あいだ」の往還や、場合によってはその「あいだ」の時空にとどまることの中にその本質があるのではないか。本パネルは、それぞれの異なった専門領域と実体験のなかでグリーフの問題に取り組んできた研究者たちによって、このことを立体的にあぶり出してみようという試みである。

代表者の安藤泰至は以上のような本パネルの趣旨を説明、確認しつつ、そうしたグリーフのもつ「あいだ」的性格を認識することで、これまでにグリーフをめぐる語られてきた諸言説の相互関係がどのように見えてくるのかを考察するとともに、現代におけるグリーフの困難さの一因が、社会におけるそうした「あいだ」性、「すきま」性の喪失ないし弱体化にあるのではないかと指摘する。

続く二人の発表者は、それぞれ医師、僧侶であるとともに、近年親族との死別を経験した者として、その体験をもとにグリーフの問題を考察する。

高橋都は、近い将来の死が避けられない者と見送らねばならない立場の者のコミュニケーションに着目し、二者の「あいだ」で死別の悲しみや死後の手続きが包み隠さず語られるようになるまでのプロセスを、自らの体験をもとに振り返る。また、患者の医学的問題を同定し解決する教育を受けてきた医療者(特に医師)が、回復が望めない患者と死について語りあうことを躊躇する背景についても考察する。

大河内大博は、臨床経験と実体験をもとに、「どこに行ってしまったのか」「今すぐ会いたい」「また会えるよね」といった亡き人の「所在」をめぐるグリーフから、亡き人の不在を語る言葉に見られる死別の痛み・悲しみの特性と、亡き人とともに生きるスピリチュアリティの発露の「あいだ」をめぐる亡き人の「存在と不在」の両面性に着目し、グリーフをめぐる死生観に照射したケアの視点について考察する。

さらに萩原修子は、公式確認から65年経過して、なお終わらない水俣病事件の被害者支援に焦点を当てる。被害者の苦難や悲嘆に寄り添う支援者は、公害認定後の訴訟を通して、全国から水俣に集まった。その支援は、さまざまなあり方で、今に至るまで持続している。持続する支援はいかにして可能なのか。とくに、水俣で生活する第一世代から第二世代の支援のいくつかの事例をもとに、その形や特徴について考察する。

コメンテータの葛西賢太は、傾聴者教育に携わってきた宗教学者の立場から、以上四人の発表についてその相互関係を明らかにする形でコメントを行い、「あいだ」をめぐるフロアとの議論につなげる。

フロアとのさまざまな議論を通じて、登壇者・参加者ともに問題の本質への自覚が深められ、グリーフやグリーフケアをめぐる宗教学の研究に新たな一歩を踏み出せるのではないかと期待している。

実態調査から窺う真宗寺院における新型コロナの影響と課題

調査の概要と結果

調査結果の分析から窺う情報化の問題

各種調査との比較検討分析

真宗寺院の伝えるべき教え

代表者：葛野 洋明

長岡 岳澄 (中央仏教学院)

安武 慶哉 (龍大)

藤丸 智雄 (浄土真宗本願寺派総合研究所)

葛野 洋明 (龍大)

司会：葛野 洋明 (龍大)

2019(令和元)年から流行した新型コロナウイルス感染症(COVID-19)(以下、「新型コロナ」と略す)の影響は、国際的に大きな変化をもたらし、日本の宗教界も例外ではない。こうした中、浄土真宗各派の寺院や、その関係者も大きな変化に戸惑いつつも実践を継続させている。浄土真宗各派の寺院が、どのような影響を受け、どのような課題に直面しているかを明らかにするため、国内外の浄土真宗各派寺院関係者を調査対象とした、新型コロナウイルス感染症の影響についてのアンケートを実施した。この調査は、龍谷大学大学院実践真宗学研究科の院生有志による「COVID-19 影響アンケート調査研究チーム」において実施され、『真宗寺院における新型コロナウイルス感染症の影響についてのアンケート報告(単純集計)』として報告された。このデータを元に、分析・検討を行い、浄土真宗各派寺院における新型コロナウイルス感染症の影響に関する、実態や課題を明らかにする。

およそ100年前に流行したスペイン風邪への仏教界の対応については、十分な歴史資料が残されていない。本調査は、感染症に僧侶が如何に対応したかの歴史資料を、将来に継承することも目的として実施され、宗教史的・宗教学的価値を有するものと考えており、本学会において広く共有したい。

1. 長岡岳澄「調査の概要と結果」

本調査は、真宗寺院関係者を対象として、寺院における新型コロナウイルス感染症の影響を調査することを目的として、2020年12月下旬から2021年1月に実施したweb調査である。本調査では、回答者の寺院での立場、寺院所在地(都道府県)、寺院における新型コロナウイルス感染症の影響の程度、推移、内容、お参りの減少割合、寺院での対応、インターネット対応への反応、報恩講法要の実施方法、寺院収入の減少割合、収束後の展望、伝えるべきこと(自由記述)、思うこと(自由記述)を尋ねた。長岡発表においては、本調査の概要と結果を報告、発表する。

2. 安武慶哉「調査結果の分析から窺う情報化の問題」

「実践研究チーム調査」は、浄土真宗各派寺院関係者を対象として、情報をICTを用いて拡散し、web上で調査を実施した。この調査結果から、情報化における実態と課題を窺うことができる。アンケートを実施し、単純集計を分析するなかで、回答者の地域分布、世代分布などをもとに、情報化の可能性と課題が明らかになると考える。また単に統計的な分析だけでなく、自由記述形式の回答にも着目したい。調査対象を国際的に実施したことから、国の内外における、実態の差異、また課題と可能性を自由回答の文言などからも明らかにする。

3. 藤丸智雄「各種調査との比較検討分析」

新型コロナウイルス感染症の影響については、様々な機関が調査を実施し、その成果が発表されてきた。各調査は、感染時期の異なる時期に実施されており、それらを比較することによって、仏教界が、経時的にどのように対応してきたかを確認したい。同時に、地域差を確認できるように調査を実施したため、コロナの影響の大小についても分析し傾向を明らかにしたい。

4. 葛野洋明「真宗寺院の伝えるべき教え」

本調査では、「伝えるべきこと」「思うこと」に関して、自由記述形式で回答できるように設問されていた。これらの回答は量的にも多く、また内容的にも多岐にわたるものであった。回答を分類・抽出し分析した。浄土真宗各派の寺院が、この厳しい状況下において、何を伝えるべきかと考えているのか。またこのように劇的に変化する状況のなかで、伝えるべき教えが、本当の意味において伝わるためには、どのような配慮が必要であるのかを窺うことができる。これによって浄土真宗各派寺院の実態や課題の一端を明らかにする。

JARS-KARS Joint Forum: Toward Post-COVID-19 Networking

Convener : FUJIWARA Satoko
 Speakers : AHN Shin (Pai Chai Univ.)
 KOO Hyung Chan (Seoul National Univ.)
 HONDA Aya (Hyogo Univ.)
 FUJII Shūhei (Tokyo Kasei Univ.)
 Discussant : KAWASE Takaya (Kyoto Prefectural Univ.)
 Chair : FUJIWARA Satoko (Univ. of Tokyo)

This forum is composed of four young and mid-career scholars: two are invitees from the Korean Association for Religious Studies (KARS) and the other two are members of the Japanese Association for Religious Studies (JARS). It aims to build scholarly networks suitable to the post-COVID-19 situation by reflecting upon the four scholars' experiences in conducting their research projects. In other words, the forum not only gives a glance at notable examples of research projects that have been going forward in each country but also finds out what younger scholars of the two countries expect from international networking with a focus on East Asia. It will further discuss how both national associations and international associations such as the IAHR can support individual scholars' efforts in international collaborations.

There have been several attempts to establish an East-Asian regional association for the study of religion in the last decades, but it has increasingly become burdensome for national associations to plan and host substantially large international conferences. In addition, COVID-19 has forced many associations to cancel their conferences, hindering scholars from physically visiting each other. Nevertheless, COVID-19 has also changed our way of communication with a greater variety of online options for meetings.

Against such backdrop, the four speakers as well as the discussants of this forum will discuss:

--whether international networks and collaborations among scholars of religion (either on particular research topics or on the study of religion in general) will benefit young and mid-career scholars, taking concrete examples from the four

speakers

--whether an East-Asian network will also be welcomed

--what are major challenges in building networks among East-Asian scholars. (Obviously, language has been a stumbling block for East-Asian scholars to participating in international collaborations. Information will be shared as to whether recent technological innovations have changed the situation for the better.)

Speakers:

Prof. Ahn Shin, Professor of the Dept. of Christian Social Welfare at Pai Chai University, specializing in phenomenology of Korean religions and sociology of New Religions

Dr. Hyung Chan Koo, Lecturer of the Dept. of Religious Studies at Seoul National University, specializing in the cognitive science of religion

Prof. Aya Honda, Associate Professor of the Sociology of Religion at Hyogo University, specializing in Buddhism and gender studies

Dr. Shūhei Fujii, Lecturer of Tokyo Kasei University, specializing in the cognitive science of religion

Discussant:

Prof. Takaya Kawase, Professor of the Dept. of History at Kyoto Prefectural University, specializing in the modern history of religions in Korea

Convener and Chair:

Prof. Satoko Fujiwara, Professor of the Dept. of Religious Studies at the University of Tokyo, Secretary General of the International Association for the History of Religions

井筒俊彦の「東洋哲学」前夜

井筒俊彦の「本質主義」理解—荀子とイブン・ハズムから—	代表者：澤井 真
比較哲学から開かれる井筒俊彦「東洋哲学」の哲学的可能性	仁子 寿晴 (同志社大)
井筒俊彦と東洋—イブン・アラビー思想との出会い—	長岡 徹郎 (京大)
	澤井 真 (天理大)
	コメンテータ：鎌田 繁 (東大)
	司会：澤井 真 (天理大)

本パネルは、井筒俊彦(1914-1993年)が、晩年に構想した東洋哲学の形成過程に焦点を当てながら、彼の東洋哲学構築への視座の一端を解明することを目指すものである。井筒は、世界的に著名なイスラーム研究者であったが、エラノス会議を機に、東洋における宗教的伝統のテキストを読み解くことで、東洋哲学の構築を目指していたことはよく知られている。しかしながら、井筒によって「東洋哲学」という語で東洋の宗教伝統が理解された結果、彼がどのように諸テキストを読み、東洋哲学へ吸収していったかはあまり掘り下げて研究されていない。また、東洋哲学を論じる以前に井筒が読んだ諸テキストの理解は、東洋哲学の構築といかに結びつくのかに関する研究蓄積も決して多くない。

こうした問題意識から、本パネルでは、井筒俊彦が東洋哲学を論じる以前を「東洋哲学」前夜と捉え、三人のパネリストが、井筒が東洋哲学を構築する形成過程について考察する。

仁子寿晴(同志社大学)の「井筒俊彦の「本質主義」理解—荀子とイブン・ハズムから—」では、イスラームの思想家イブン・ハズムと荀子を本質主義という視点から考察する。井筒が晩年に著した『意識と本質』(1983年)だけでなく、それ以前の英語著作にも「本質主義」(essentialism)への言及が見える。井筒が参加したエラノス論文(1968)では、荀子が「本質主義」の代表例として挙げられている。また、『イスラーム神学における信の概念』(The Concept of Belief in Islamic Theology, 1965)では、イブン・ハズム(西暦1064年歿)の言語論が、度々引用される。このように、荀子とイブン・ハズムの言語論は類似点が多いが、イブン・ハズムは決して本質主義者でない。この視点から、井筒の存在/本質の二分法が

何を意味するのかを検討する。

長岡徹郎(京都大学)の「比較哲学から開かれる井筒俊彦『東洋哲学』の哲学的可能性」では、比較哲学を基礎とする思想空間からなる井筒「東洋哲学」の哲学的可能性を、京都学派の哲学も参考にしながら、浮かび上がらせることを目指す。井筒俊彦は、「東洋哲学」を構想するための試論的・仮説的段階として、自ら編み出した哲学的方法論である「意味論的分析」をテキストに加えることによって、「共時的構造」と呼ばれる他に類をみない比較哲学による思想空間を形成することを試みた。それは、徹底的にテキストに依拠しながら体験のリアリティーへと迫ろうとする、極めて独創的な方法論である。

澤井真(天理大学おやさと研究所)の「井筒俊彦と東洋—イブン・アラビー思想との出会い—」では、井筒のイブン・アラビー(西暦1240年歿)の理解から、彼の構想した「東洋」を明らかにすることを目指す。井筒は、海外においてイブン・アラビーの研究者としても知られている。井筒は、戦前からイブン・アラビーについて関心を抱き考察していたが、本格的に著作として登場するのは後のことである。「存在一性論」と呼び表されてきたイブン・アラビー思想は、井筒が東洋哲学を構築するうえでの思想的基盤となった。そこで、イブン・アラビーが、井筒が見た「東洋」や東洋哲学へと構築されていく過程を明らかにする。

これら三発表に対して、コメンテータとして、イスラーム思想研究者であり、井筒俊彦の思想を長らく研究してきた鎌田繁(東京大学東洋文化研究所)がコメントを行なう。井筒が最も時間を割いて研究したであろうイスラームの視点からのみならず、彼の東洋への視覚を交えながら質疑応答を行う予定である。

性愛と暴力の神話学

北米先住民神話にみる性愛と暴力	代表者：木村 武史
日本近世における女の虐殺説話とカミーお菊、お花を中心にー	木村 武史 (筑波大)
同性愛と暴力ー古代エジプトの事例ー	南郷 晃子 (神戸大)
征服のトラウマとしてのインカリ神話と民衆劇	深谷 雅嗣 (愛知県立大)
ギリシア神話における性愛と暴力	谷口 智子 (愛知県立大)
	松村 一男 (和光大)
	司会：木村 武史 (筑波大)

本パネル「性愛と暴力の神話学」は、比較神話学の観点から、性愛と暴力の神話伝承についての共同研究を行ってきた研究成果が出版されるのを機に、改めて検討しようとするものである。すべての神話が性愛と暴力という要素を持つわけではないが、フロイトがエロスとタナトスの密接な関係について述べたように、様々な地域に性愛と暴力(死)の要素が結びついた神話伝承が見られる。本パネルは、宗教研究における性愛と暴力という観点にも目を向ける契機となる意義を持っている。

木村武史「北米先住民神話にみる性愛と暴力」

北米先住民の間にはヴァギナ・デンタータ(膣に歯を持つ怪物)の類型として知られる神話が多く知られている。この神話の意義は単独では十分には理解できず、他の神話伝承との関連づけることが必要である。本発表では、ホピの神話に見られるヴァギナ・デンタータの怪物、性愛と豊穡の神ココペリ、ホピの主神マーサウ等の神話伝承を取り上げながら、性愛と暴力のモチーフがどのように先住民族社会の中で紡がれてきたのかを検討する。その際、暴力の意味も直接的な身体的暴力だけではなく社会的暴力も含めて検討する。

南郷晃子「日本近世における女の虐殺説話とカミーお菊、お花を中心にー」

日本近世の説話には、身分的周縁にある女の虐待・殺害をモチーフとするものが散見される。本発表では、皿屋敷伝承の主人公として広く知られる「お菊」、そしてお菊同様各地に残る「花」という女の伝承を取り上げる。17世紀の説話におけるお菊譚には、「母」が重要な要素として存在する。また「お花」という名前の女には豊穡性、美のイメージが伴うが、それは過剰に愛され殺される女としての表象に変容する。これら花の名前を持つ女の説話を取り上げながら、イエの継続が重要な課題となる近世武家を舞台とする怪異譚のうち含まれる、カミの物語としての要素を検証する。

深谷雅嗣「同性愛と暴力ー古代エジプトの事例ー」

神話『ホルスとセトの争い』には、セトがホルスの尻を犯す奇妙な小話が含まれる。誰かの尻(ペフ)を犯すことは、力(ペフティ)を行使し、服従させることと同じだった。これは、同性「愛」ではなく、同性「暴力」に過ぎず、性行為における男女の序列がそのまま反映されている。この神話は、同音語を重ねる韻文として親しまれ、ついには「ロバが彼を犯しますように」という脅しの常套句に発展した。混沌と無秩序を象徴するセトの神話上の役割を明らかにしつつ、文学や呪術に登場する世俗の同性愛にも触れ、そのあり方について考えるきっかけにしたい。

谷口智子「征服のトラウマとしてのインカリ神話と民衆劇」

インカリ神話はハイヌウェレ型の神話であり、神の死んだ身体から有用植物が発生するというアンデス古来のパチャカマック神話の派生系である。断片に切り刻まれた種イモは畑のあちこちに埋められ、新しい芋として芽を出し成長する。ただ、インカリ神話の特徴は、いずれその復活が期待されるメシアニズムと結びついている。本発表では、現代ペルーの民衆劇とインカリ神話に見られる共通のパターン(インカ王の殺害とその後の再生復活)を考察する。

松村一男「ギリシア神話における性愛と暴力」

神話の多くは秩序の成立を物語る。この過程を語る神話の技法のひとつが性愛と暴力のペアの活用ではなかったか。秩序の成立とは古い無秩序の死と新しい秩序の誕生であり、これは生命誕生の契機としての性愛と死のペアとも変換できるだろう。ギリシア神話ではこのペアが性愛と死をもたらす暴力として表現されたかを検証してみる。取り上げるのはギリシア人にとっての規範的なテキストであったホメロスの『イリアス』と『オデュッセイア』である。そしてそこでの検討をさらに確認するため、ペルセウスによるメドゥーサ殺しについても分析を行う。

アメリカで仏教を語る―世紀転換期の日本人仏教者を手がかりに―

アメリカ禅成立の萌芽―シカゴ万国宗教会議を契機に―	代表者：守屋 友江
変容する移民社会と禅布教―世界仏教徒大会と千崎如幻を事例に―	嵩 宣也 (龍大)
越境する禅者・佐々木指月の文学的挑戦とその時代	末村 正代 (関西大)
	堀 まどか (大阪市立大)
	司会：守屋 友江 (南山宗教文化研究所)

パネルの要約と意義

本パネルは、禅 (Zen) のグローバル・ヒストリーに関する共同研究 (代表・守屋友江、科学研究費補助金基盤研究 (B)「禅から Zen へ―世界宗教会議を通じた禅のグローバル化の宗教史・文化史的研究」20H01192) に携わるメンバーで構成される。この科研は、19 世紀末から 20 世紀半ばに開催された複数の世界宗教会議を手がかりとして禅仏教のグローバル化を捉え直すことを目的としたもので、これまで「グローバル禅ワークショップ」(2020 年 6 月 20~21 日) 等を開催して議論を重ねてきた。

パネルの参加者は、同科研内の小プロジェクト、戦後アメリカにおける Zen ブームを検証する研究班に属しており、とくにアメリカ禅成立の道程を明らかにすることを主眼として研究を進めている。現在は、アメリカに渡った開教師 (使) らの文献をもとにシカゴ万国宗教会議 (1893 年) から戦後 Zen ブームに至る期間、主に戦間期のアメリカにおける禅布教の精査をおこなっている段階である。

上記プロジェクトの中間報告として、本パネルでは世紀転換期にアメリカへ渡った日本人仏教者の言説を取り上げ、当地における日本仏教の発信と受容のあり方について考察する。仏教をめぐる欧米の学問状況、在米邦人をめぐるアメリカ社会の変化等もふまえながら、彼らがいかなるコトバで仏教を語ったのか、主に翻訳や文学の観点から検証する。それぞれの発表では、潮目を分けた宗教会議や、アメリカ禅草創期における日本人禅者の多彩な創作活動に着目し、日本仏教、とりわけ禅が拡大していく多元的プロセスを描出することを試みる。これまで鈴木大拙に偏重して論じられがちであった欧米仏教がいかに広い領域に及んでいたか、その実態を解明する。

近代日本仏教の一事例として禅のグローバル化を取り上げる本パネルの試みは、当時の東西思想交流全体が孕んでいた課題や限界の明確化にも寄与することが期待される。

発表者と報告内容

発表は、嵩宣也、末村正代、堀まどかの順でおこなう。

嵩宣也は、1893 年のシカゴ万国宗教会議と英文雑誌 *The Open Court* の論説を手がかりに、アメリカ禅 (Zen) 成立の萌芽を考察する。これまでの研究では、アメリカにおける禅ブームの立役者として鈴木大拙が注目されてきた。しかし、アメリカで禅が成功するためには、それ以前の土壌も重要であったと考えられる。本発表では、日本仏教の読者層が、ヨーロッパ仏教からアメリカ仏教へと変化したこと、漢語仏典の西洋進出が図られていたことに注目し、アメリカ禅成立の前提を検討する。

末村正代は、1915 年にサンフランシスコで開催された世界仏教徒大会に参加した日本人仏教者の言説をもとに、シカゴ会議以降の移民社会と伝道様式の変化を考察する。加えて、西海岸で禅布教をおこなった釈宗演の門人、千崎如幻を英語伝道の先駆者として紹介し、その活動について報告する。千崎が他の禅者や思想家と交わした書簡を手がかりとしながら、彼がいかなる仕方でアメリカ人にアプローチをおこなったのかを検討する。

堀まどかは、国境を越えて表現しつづけた禅者・佐々木指月 (彫刻家→詩人→禅の布教者) の、詩と風俗描写、及びその背景となるモダニズム文学思潮を扱う。彼の大正期日本文壇での挑戦的な活躍、また日米を往き来する詩人としての「ことば」(日本語・翻訳語) に対するアヴァンギャルドな模索は、詩史のなかでどう位置づけられるのか。本発表では、村野孝顕による米国仏教布教に関する同時代把握 (特に文学・翻訳・美術面の理解) を参照しながら、指月の表現の同時代的な位相を検討する。

冒頭のパネル趣旨説明と発表後の総括を守屋友江がおこなう。

科学技術に浸透する／される宗教

近未来・技術社会における宗教の残滓	代表者：師 茂樹
仏教から見たビッグデータ社会の問題	小原 克博 (同志社大)
現代汎心論のゆくえ	師 茂樹 (花園大)
変容する信仰媒体が創造する世界観	沖永 宜司 (帝京大)
ソーシャル・ロボットを活用した宗教文化教育の可能性	永原 順子 (阪大)
	石田 友梨 (岡山大)
	司会：師 茂樹 (花園大)

本共同研究グループでは、2018年より継続してパネルを開催し、AIやロボット等と宗教の問題について検討してきた。AI等はしばしば人との類似性が問題となるが、一方で非人格的なAI等はネットワーク社会の隅々まで浸透している。本パネルでは、これまでより広い視点から、AI等をはじめとする科学技術が宗教を含めた社会に浸透するとともに、逆に宗教がそこに浸透していく可能性について検討したい。

◇小原克博「近未来・技術社会における宗教の残滓」：第5期科学技術基本計画において提唱されたSociety 5.0(サイバー空間とフィジカル空間を高度に融合させたシステムによって開かれる未来社会)に代表されるように、科学技術の高度な進展を前提として未来社会をデザインすることが増えてきた。こうした事例を取りあげながら、未来社会のデザインの中に宗教がどのような役割を残しているのかを考察することによって、宗教が変容しながら科学技術に浸透する可能性を探る。また同時に、ユヴァル・ノア・ハラリ『ホモ・デウス』において、データ教(dataism)が未来の宗教となると論じられているように、科学技術が宗教に浸透する可能性を探ることによって、近未来社会における科学技術と宗教の相互浸透性を明らかにしていく。

◇師茂樹「仏教から見たビッグデータ社会の問題」：近年、SNSやキャッシュレス決済等を通じて記録したビッグデータをもとに、人々の行動を予測し、「最適」化された社会サービス等を提供しようというデータ資本主義、監視資本主義が広がりを見せ、国家による統治にも導入されつつある。そこでは、アイデンティティやプライバシー、未来を自己決定する自由などへの侵害も懸念されている。本発表では、S. Hongladarom. The Ethics of AI and Robotics: A Buddhist Viewpoint. の議論を起点に、この問題に対して仏教倫理の立場から検討したい。

◇沖永宜司「現代汎心論のゆくえ」：近代科学の発達によって、すでに過去の思想として博物館入りになっていた汎心論が、近年再び注目を集めている。そこには、物質から意識の生成の説明を、物理的世界全体に意識の基本的な性質を認める議論へとシフトさせたD. チャーマーズなどからの影響が大きい。その特徴は物理主義を放棄するのではなく、反対に物理主義の徹底が汎心論を導いたことにある。本発表ではこの意識化する物質という議論の問題点の検討を通じ、「科学技術に浸透する宗教」というテーマを照らしてみたい。

◇永原順子「変容する信仰媒体が創造する世界観」：先日、醍醐寺と人工衛星開発会社との業務技術提携による宇宙寺院の開山がなされた。打ち上げ予定は2023年で、大日如来と曼荼羅を搭載した人工衛星は、宇宙から世界の安寧と平和を祈るという。その他、サイバー空間を媒介とした、オンライン墓参り、ヴァーチャル参拝、ウェブ賽銭などが従来から行われており、技術の進歩は、信仰の媒体を多様化させている。また、昨年は、コロナ禍の影響によって神事の動画配信なども行われた。これら、信仰の媒体が変容することは、代替としての宗教的空間にすぎないのか、それとも新たな世界観を創造することになるのかについて論じてみたい。

◇石田友梨「ソーシャル・ロボットを活用した宗教文化教育の可能性」：ソーシャル・ロボットを宗教の分野にも取り入れた事例として、京都高台寺のアンドロイド観音「マインダー」や中国龍泉寺のロボット僧「賢二」を挙げることができる。これらのロボットは寺の訪問者を相手にすることを想定しているが、異なる宗教を信仰している相手を想定したロボットはどうあるべきか。異なる宗教や文化に対する理解を深めるためのロボット構想について、教義の機械学習や「弱いロボット」設計の点から論じる。

コロナ禍の「人生会議」－「生と死」にどう向き合うか－

「人生会議」をめぐる問題提起	代表者：沖永 隆子
人生会議は「自律的」な営みか？	沖永 隆子（帝京大）
人生会議を在宅医はどう考えているか	秋葉 峻介（山梨大）
当事者のナラティブから垣間見る人生会議	井口真紀子（上智大）
終末期・看取りの中で燃え尽きるかつかないかの闘い	入澤 仁美（順天堂大）
	蒔田 栄（大曲聖書バプテスト教会）
	司会：沖永 隆子（帝京大）

新型コロナウイルスの流行は中世以来の不条理な死が社会を覆った経験でもあり、人々の死生観に少なからず影響を及ぼしている。これは死とどう向かい合うかという問題の重要性が再度浮かび上がってきた事態でもあった。

いのちに関わる万が一の時、どんな医療やケアを受けたいかを自分の意思で決定できない状況に備えて、家族や医療者らと繰り返し話し合うことを「アドバンスケアプランニング、ACP」という。厚生労働省が「人生会議」の愛称をつけ普及を目指してきたが、2019年11月の「人生会議」啓発ポスターが物議を醸し永久撤収された。

本パネルでは、まず「人生会議」に関する議論の動向を整理し、「決まらないこと／決めないこと」の重要性について問題提起を行う（沖永）。次に、自律概念を手蔓として「人生会議」の構造を整理し、問題点を提示する（秋葉）。続いて、終末期の現場で「決まらないこと」とどう付き合うのかを当事者の立場から発言する。人生会議の担い手の一員とされる在宅医はどう考えているのか（井口）、患者は「決まらない」中でどう生きてきたのか（入澤）、家族の立場で、決められなさに宗教者・信仰者としてどう向き合ったか（蒔田）。

以上の「人生会議」をめぐる「生と死」の様々な葛藤、苦悩とどう向き合うかを話し合い、死のリアリティが変化した時代の生と死について改めて考える。

1. 沖永隆子（帝京大学・倫理学の立場から）：『「人生会議」をめぐる問題提起』

演者の博論 ACP 意識調査結果で特徴的な「決まらないこと」を紹介し、「なぜ終末期に意思決定する必要があるのか」「生きハラとデスハラ（生と死に対するハラスメント）」等、問題提起を行う。

2. 秋葉峻介（山梨大学・哲学の立場から）：「人生会議は

『自律的』な営みか？」

COVID-19 感染拡大における人工呼吸器取外し/再配分の問題や、「安楽死」「尊厳死」の議論でも人生会議（のようなもの）が登場することがある。そこで、自律概念を手掛かりとして「人生会議」をめぐる自己決定至上主義とケア倫理との奇妙な共謀関係について批判的に検討し、問題点を洗い出す。

3. 井口真紀子（上智大学・在宅医の立場から）：「人生会議を在宅医はどう考えているか」

人生会議の担い手である医師もまた迷ったり悩んだりしている。在宅医として臨床に関わりつつ医師のインタビュー調査を行っている立場から、死にゆく患者の意思決定支援を在宅医がどう経験し何を重視しているかについて紹介する。

4. 入澤仁美（順天堂大学・患者の立場から）：「当事者のナラティブから垣間見る人生会議」

人生会議においてはヘルスコミュニケーション能力が必要とされるが、患者と医療者では知識面でのギャップが大きく、患者は緊張するばかりである。そのような状況下で終末期の QOL 及び QOD を向上させるにはどのような課題があるのか。当事者のナラティブから垣間見る人生会議を例に、ヘルスコミュニケーションの充実について考えたい。

5. 蒔田栄（大曲聖書バプテスト教会・牧師の立場から）：「終末期・看取りの中で燃え尽きるかつかないかの闘い」

演者は、キリスト教の牧師。48歳の時、妻50歳が「癌」になった。子供6人（中学3年～小学校4年、5男1女）を抱える。まるで交通事故にでもあったような気持ち。さあ、どうする！急な危機にボー然とした。そのような「決められない」事態に直面した時に聖書の世界観と関連深いストレス対処力 SOC により克服した例を報告したい。

2021年8月24日発行

編集・発行 日本宗教学会 第80回学術大会実行委員会

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35

関西大学文学部哲学合同研究室内

HP : <http://jpars.org/conference/>